福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1340 集

博 多 160

― 博多遺跡群第 206 次調査報告 ―

2018
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1340 集

博 多 160

― 博多遺跡群第 206 次調査報告 ―

遺跡略号　HKT-206
調査番号　1608

2018
福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれらを物語る文化財が多く点在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は、共同住宅建設に伴い、博多区奈良屋町で実施した博多遺跡群の第 206 次調査の報告書です。博多遺跡群は中世の一大貿易拠点と考えられており、特に今回調査を実施した奈良屋町周辺は中世の後半期以降、遺跡の中心として東アジア各地と活発に交流していたことが明らかになっています。今回の調査で出土した東アジア産の輸入陶磁器はその交流を示すものであり、この成果によって、遺跡の重要性をより一層明確にすることができました。本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご理解とご協力をいただきました株式会社ランディックアソシエイツ様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成 30 年 3 月 26 日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例言

1．本書は、福岡市教育委員会が平成 28 年 6 月 13 日から 8 月 24 日まで博多区奈良屋町で実施した博多 206 次調査の発掘調査報告書である。

2．遺構は、掘立柱建物を SB、井戸を SE、土坑を SK とそれぞれ記号化し、すべての遺構を 01 から通して番号を付した。柱穴は SP と記号化し、上記遺構とは別に 01 から通し番号を付した。なお整理の段階で土坑を柱穴に変更したものがあり、遺構番号には欠番がある。

3．本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。

4．本書に掲載した遺構実測図は早田有輝子、中尾祐太による。

5．本書に掲載した遺物実測図は相原聡子、中尾による。

6．本書の掲載した遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。

7．本書に掲載する遺物の分類に関しては、主に以下の文献を参照した。

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第 2 号
日本貿易陶器研究会

小野正敏 1982「14 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第 2 号
日本貿易陶磁研究会

楠瀬慶太 2007「土師器食膳具からみた中世博多の土器様相 - 博多遺跡群の土師器編年 -」
『九州考古学』82　九州考古学会

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

森本朝子・片山まび 2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案 - 生産地編年を視座として -」
『博多研究会誌』第 8 号

8. 本書にかかわる記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1608	遺跡略号	HKT-206
調査地	博多区奈良屋町46番1・2、47番1・2・3・4	分布地図図幅名	048
申請地面積	265.73㎡	開発面積	161㎡
調査実施面積	170㎡	事前審査番号	27-2-1071
調査期間	平成28年6月13日～平成28年8月24日		

本文目次

Ⅰ　はじめに 1

１．調査にいたる経緯 1

２．調査の組織 1

３．遺跡の立地と歴史的環境 2

Ⅱ　調査の記録 6

１．調査の概要 6

２．遺構と遺物 8

（１）掘立柱建物 8

（２）溝 8

（３）井戸 9

（４）土坑 11

（５）その他の出土遺物 19

Ⅲ　小結 20

挿図目次

Fig1　周辺遺跡分布図（1/50,000） 3

Fig2　博多遺跡群各調査地点位置図（1/8,000） 5

Fig3　第 206 次調査地点位置図（1/1,000） 6

Fig4　第 206 次調査遺構配置図（1/100） 7

Fig5　SB38 実測図（1/60） 8

Fig6　SD06・12・35 実測図（1/40）および SD06 出土遺物（1/3） 9

Fig7　SE02・37 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 10

Fig8　SK03 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 11

Fig9　SK05 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 12

Fig10　SK07 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 12

Fig11　SK09・10・11 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 13

Fig12　SK13・14・15・16・17 実測図（1/40）
　　および SK13・14・16 出土遺物実測図（1/3）14
Fig13　SK19・20・21・22・24 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）15
Fig14　SK26・27 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）17
Fig15　SK28・29 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）18
Fig16　SK33・36 実測図（1/40）および SK33 出土遺物実測図（1/3）19
Fig17　その他の出土遺物 1（1/3）21
Fig18　その他の出土遺物 2（1/3）22
Fig19　その他の出土遺物 3（1/3）23
Fig20　その他の出土遺物 4（1/3）24
Fig21　その他の出土遺物 5（1/3）25
Fig22　第 206 次調査遺構配置図 2（1/150）26

図版目次

PL1　1　調査第 1 区全景（南西から）　2　調査第 2 区全景（北から）

PL2　1　調査第 3 区全景（西から）　2　SK03 礫出土状況（南東から）

PL3　1　SK07 検出状況（南西から）　2　SK27 完掘状況（北から）

PL4　1　SK36 完掘状況（北東から）　2　SE37 完掘状況（南東から）

PL5　1　SK03 出土遺物（14）　2　SK19 出土遺物（35）

　　3　SK26 出土遺物（50 外面）　4　SK26 出土遺物（50 内面）

　　5　その他の出土遺物（73）　6　その他の出土遺物（78）

　　7　その他の出土遺物（84）　8　その他の出土遺物（85）

Ⅰ　はじめに

１．調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区奈良屋町 46 番 1・2、47 番 1・2・3・4 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 28 年 3 月 4 日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから確認調査を実施し、現地表面下 140cm で遺構が確認されたため、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、予定建築物の建物範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 28 年 6 月 9 日付で株式会社ランディックアソシエイツを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 6 月 13 日から発掘調査を、翌平成 29 年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査の組織

調査委託：株式会社ランディックアソシエイツ
調査主体：福岡市教育委員会
発掘調査：平成 28 年度・資料整理：平成 29 年度

調査総括：文化財部埋蔵文化財課	課長	常松　幹雄
	同調査第２係長	加藤　隆也 (28 年度)
		大塚　紀宜 (29 年度)
調査庶務：埋蔵文化財課管理係	係長	大塚　紀宜 (28 年度)
	同係	横田　　忍 (28 年度)
文化財保護課	課長	宮崎　誠二 (29 年度)
	管理調整係係長	藤　　克己 (29 年度)
	同係	松原加奈枝 (29 年度)
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係	事前審査係長	佐藤　一郎 (28 年度)
		本田浩二郎 (29 年度)
	同係主任文化財主事	池田　祐司
	同係文化財主事	清金　良太
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係	文化財主事	中尾　祐太

発掘作業：唐島栄子、桑原美津子、村山巳代子、中村桂子、桒野孝子、安東昌信、許斐拓生、
上野照明、鷲崎哲夫、遠竹卓馬、早田有輝子（福岡女子大学学生）

整理作業：国武真理子、窪田慧

３．遺跡の立地と歴史的環境

博多湾沿岸に位置する博多遺跡群は砂丘上に立地する遺跡である。この砂丘は３つの列をなしているとされており、内陸から砂丘１・砂丘２・砂丘３と称される (磯・下山・大庭・池崎・小林・佐伯 1998)。最も北に位置する砂丘３は文献資料から「息浜」と呼称されており、これに対する内陸側の二列を便宜的に「博多浜」と仮称している。

博多遺跡群においてはじめて遺構が検出されるのは、弥生時代前期であるが、まずは最も内陸に位置する砂丘 1 において認められる。その後、時期が下ると集落的な様相が強くなるとともに、遺構の検出範囲が砂丘２へと拡大する。弥生時代終末期～古墳時代前期にかけては畿内系や山陰系、東海系などの他地域の土器が複数確認されており、早くも立地的な環境をいかした対外交流の拠点としての側面がうかがえる。博多浜には前方後円墳も築かれ，いわゆる博多一号墳と呼称される古墳は，近年調査された 198 次調査でもその一部が確認されている。

奈良時代になると博多浜の全域で遺構がみられるようになる。また、積極的な土地利用とはいえないが、息浜にも人跡が進出した跡が伺える。遺構の増加に直接的に関係するのは正方位をとる溝から推定される官衙域の存在であろう (池崎 1988)。この官衙は文献資料からその存在を確認することはできず、詳細は全く不明であるといわざるを得ない。しかし、帯金具や官職を示す「長官」「佐」を記した墨書須恵器、皇朝一二銭が周辺を中心に出土することから、その存在はほぼ確実といっても過言ではない。また、継続的な調査、およびそれらの蓄積から、官衙域周辺には「集落域」、「港湾域」と仮称される別の区画があった可能性が想定されている (本田編 2010 など)。特筆すべきは、これらの各区画からも、官衙域同様の官人階級関連遺物が一定のまとまりをもって出土していることであり、当該期の博多には、官衙を中心とした官人関連施設が広範囲にわたって展開していたと考えられる。これらの遺構群は、立地的・環境的側面からみても、鴻臚館との関連は少なからずあるものと考えられる。鴻臚館は、筑紫館を前身とし、当初は外交施設としての役割を担っていていたが、後に貿易拠点として機能したとされており､越州窯系青磁碗を典型とする当時の中国陶磁器が多数出土する。これらの遺物は近接する博多遺跡群でも出土しており、鴻臚館を補完する役割を担っていた可能性は十分考えられる。

鴻臚館からは 11 世紀中頃以降の遺構・遺物がほとんど確認されていないが、同時期以降、文献資料にもその名がみられなくなる。最後に記述された『扶桑略記』では放火されたことが記されており、焼失後放棄されたと考えられている。この時期を前後して、博多遺跡群では遺構・遺物が急増することから、貿易拠点が鴻臚館から博多に移ったと理解されている。これが博多における最も重要な画期であるが、博多湾沿岸における拠点の円滑な移動の背景には、上記のような立地環境を含めた古代以来の関係性があったのだろう。

博多遺跡群における貿易の拠点性は他を凌駕する貿易陶磁器の量や、これに墨書された中国人名、「綱 (首)」に如実に表れている。また、中国の貿易商人は「博多津唐房」を形成し、これを拠点として貿易を行っていたと考えられる。拠点は遺構の分布状況から当初は港に近い博多浜の西側一帯に形成されていたと推定されている。

なお、12 世紀初頭になると、埋め立てにより博多浜と息浜は陸続きになったことが明らかになっている。上記のとおり遺跡の中心は博多浜であるが、息浜では陸続きになって間もなく道路が整備される (165 次・204 次)。本道路は後に遺跡全体にかけて整備される道路に先行するが、古代の博多

1. 博多遺跡群
2. 箱崎遺跡
3. 鴻臚館跡
4. 堅粕遺跡
5. 吉塚遺跡
6. 吉塚祝町遺跡
7. 吉塚本町遺跡
8. 多々良込田遺跡
9. 多々良遺跡
10. 顕孝寺
11. 香椎 A 遺跡
12. 香椎 B 遺跡
13. 香椎 E 遺跡

Fig1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

浜でみられるどの町割りにも系譜をもたず、かつのちに博多浜で整備される道路とも異なる軸をもち、砂丘の尾根線に規制されたものと考えられている。

13 世紀後半の蒙古襲来を画期として、都市博多のありかたは著しく変容する。1274 年の「文永の役」後、博多湾沿岸に設置された元寇防塁は、博多遺跡群でも 111 次などで確認されている。防塁が築かれてからは、息浜の都市化が一層顕著になるとされており、一帯における遺構の検出割合は前代と比して著しく増加する。このころになると、博多浜西側にあった従来の港は機能を失い、息浜に移動したと考えられている。14 世紀後半以降出土する東南アジア系の陶磁器は博多浜北部から息浜を中心に出土することから、港の中心地の移動過程を示す資料にもなり得るだろう。15 世紀になると遺構の検出割合において息浜が博多浜を上回り、息浜の一層の発展がうかがわれる。この時期の特徴的な遺構である石積遺構は、当初は博多浜北部でみられるが、15 世紀以降は息浜での検出数が圧倒的に多くなることが明らかになっている。目前には石塁という豊富な材料があり、これを転用したのだろう。

時期が前後するが、元軍の 2 度目の襲来「弘安の役」の後は、博多に鎮西探題が設置され、同時期の博多浜では広範囲にわたる道路の整備が行われる。博多遺跡群内で実施される発掘調査は、市街地で行われることから、広範囲におよぶ調査がほとんどないのが現状であり、点的な調査が圧倒的に多い。それにもかかわらず各調査地点で複数の道路が検出されており、当時の道路が復元可能な状態にまでなっている。博多浜の道路は遺跡群を縦断する幹線道路とこれに交差する支線道路に分かれる。これらの道路面は地形や寺域を考慮して、若干軸を変えながらも、ほぼ長方形を志向したものであるということが明らかになっており、該期の都市はこの道路を軸に展開したと考えられる。一方息浜では、12 世紀代の道路が若干位置を変えながらも、本時期まで継続していることから、町割りの長期的な継続をうかがうことができる。息浜における町割りは地形に即したものであることは述べたが、165 次・204 次の北側に位置する 68 次調査の石塁状遺構は道路と同軸をとるのに対し、東の息浜の中心に位置する 111 次調査で検出された石塁は現在の町筋に近い。このことから息浜西側では東西方向を基本とした町割りが整備され、111 次調査地点の西側付近に変換点があり、以東は現在に近い軸をもつ町割りがなされていたものと考えられる。このことは建物や溝などの方位の志向性が推察できる遺構にも顕著に表れている。

本書で報告する 206 次調査地点は息浜の西側に立地し、中世後半期の遺構・遺物を複数検出している。また、溝等の方位の志向性が推定できる遺構は、いずれも 165 次・204 次調査の道路状遺構に平行・直交している。本調査の成果は上記のあらゆる事象と矛盾せず、中世後半期の息浜の様相をより一層明確にすることができたといえよう。

参考文献

池崎 譲二　1988 「町割りの変遷」『よみがえる中世 1 －東アジアの国際都市 博多』 平凡社
磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次　1998 「博多遺跡群をめぐる環境変化－弥生時代から近代まで」福岡平野の古環境と遺跡立地 - 環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版会
本田浩二郎編　2010 「博多 135 －博多遺跡群第 172 次調査報告」市報第 1086 集

Fig2　博多遺跡群各調査地点位置図（1/8,000）

Ⅱ　調査の記録

1．調査の概要

第 206 次調査地点は博多遺跡群の北側、文献資料にみられる「息浜」内に位置する。周辺では複数次の調査が実施されており、北側には 55 次調査地点が、南側には 46 次調査地点が、東側には 83 次調査地点・116 次調査地点が、西側には 93 次調査地点・141 次調査地点が所在する。

本調査は敷地面積 265.73㎡のうち、共同住宅建設により埋蔵文化財へ影響があると判断される 170㎡を対象に実施した。

周辺の調査結果などから複数面の遺構面が想定されていたが、調査開始に先立ち、表土鋤取りを実施した結果、地山直上まで攪乱されている部分が多く、実質 1 面のみの調査となった。砂丘面の標高は約 1.5m である。

上記のとおり、調査前の 6 月 7 日、8 日に事業主協力のもと表土の鋤取りおよび搬出を実施し、翌週の 6 月 13 日に機材を搬入。調査は翌日の 6 月 14 日に開始した。排土置場の都合上、調査は調査区を 3 区に分割して実施した。1 区を調査区の北東部とし、南西部を第 2 区、両調査区の間を第 3 区として、番号順に調査を実施した。それぞれ遺構検出、掘削、記録作業を順次行い、第 1 区の調査は 7 月 1 日まで、第 2 区の調査は 7 月 2 日から同 28 日まで、第 3 区の調査は 8 月 1 日から同 23 日まで行った。撤収作業は調査終了の翌日 24 日に行い、調査にかかる全ての作業を終了した。

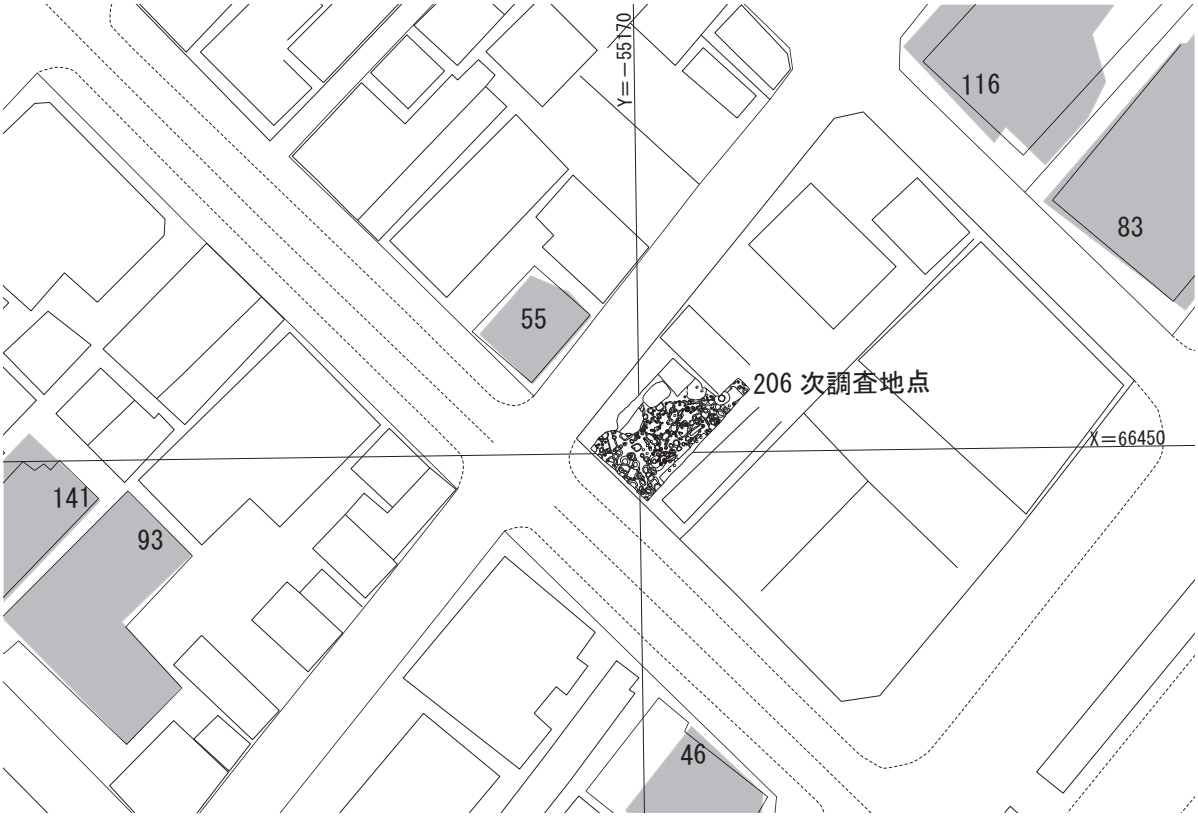


Fig3　第 206 次調査地点位置図（1/1,000）

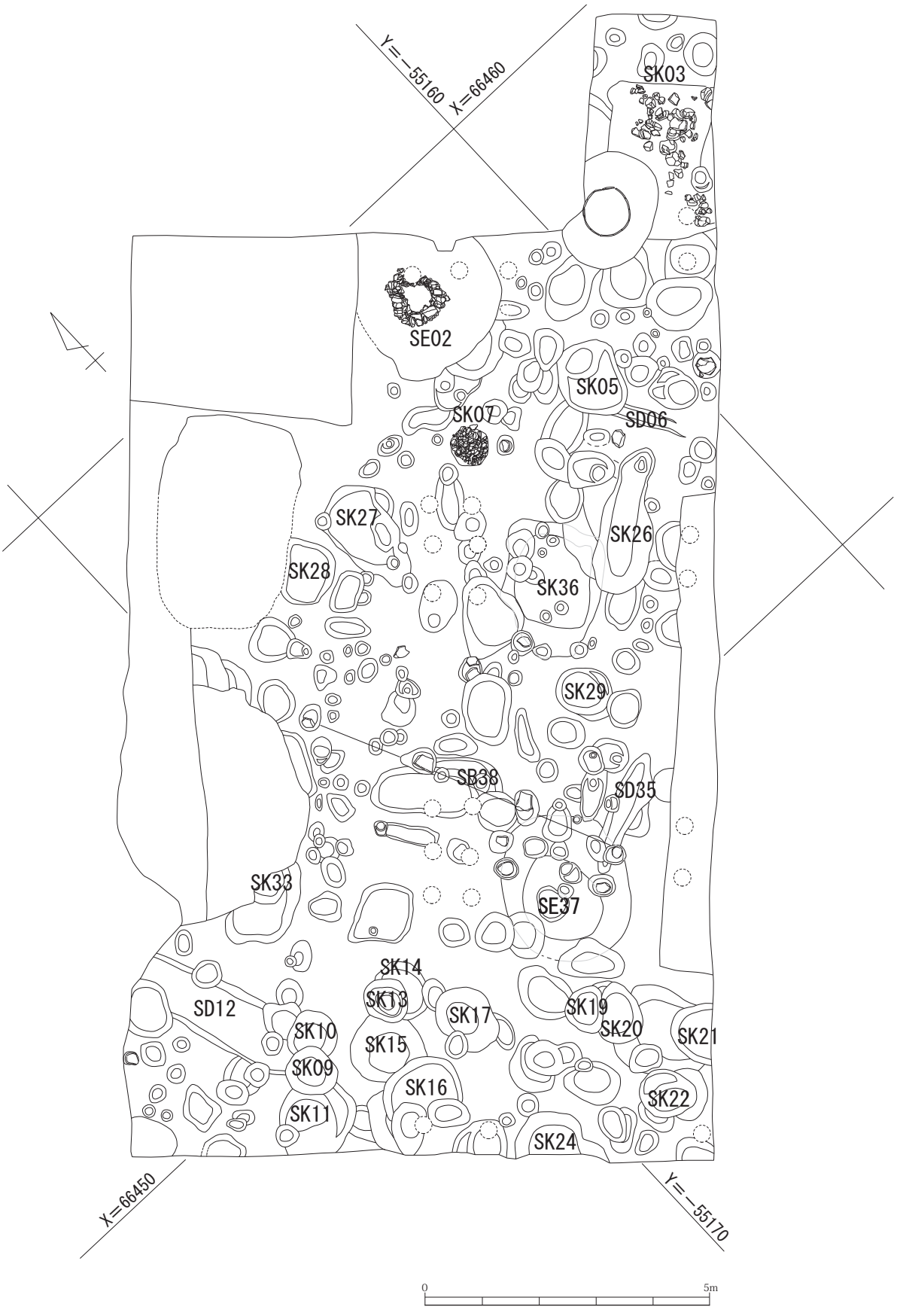


Fig4　第 206 次調査遺構配置図（1/100）

２．遺構と遺物

（１） 掘立柱建物

建物を構成するピットは調査区の中央に集中している。ピットは数基で列をなしており、数回の建て替えがあったと推定される。

SB38（fig5）

調査区中央やや西よりで検出した柱穴列で、いずれも根石を有する。一連の物と判断できたのは柱筋が通る約 6m 分の柱穴列のみである。これら以外にも根石をもつ柱穴があることから復元を試みたが、建物としてまとめることができなかった。本建物は、はじめに述べた息浜の砂丘および周辺調査地点の溝や建物などと同軸をとる。また、周辺のピットのなかには SB38 に平行、直交するように列をなすものがあり、本来はさらに数棟の建物が建っていた可能性が指摘できるとともに、町割りおよびこれに規制された屋敷地の長期的な存続をうかがうことができる。確認できた出土遺物はいずれも小片であり、時期を特定できるものはない。

（２）溝

本調査区で検出した溝はいずれも上記の柱穴列と近い方位軸をもつ。

SD06（Fig6）

調査区の東側で検出した南北方向の溝である。幅 25cm 程度で、深さは最深部で 20cm 程度残存するが、全体的に残りは悪い。出土遺物で図示し得たのは以下の 1 点のみで、詳細は不明であるが、中世後半の遺構である。

1 は土師器皿である。底部の切り離しは糸切りで、器高 3cm、口径 12㎝、底径 8.4cm を測る。

SD12（fig6）

調査区南西部で検出した。南北方向の直線的な溝である。北側は調査区外にのび、南側はピットなどに切られる。幅は約 104cm。断面は逆台形を呈し、深さは 25cm 程度残存する。出土遺物はいずれも小片で、時期は不明である。

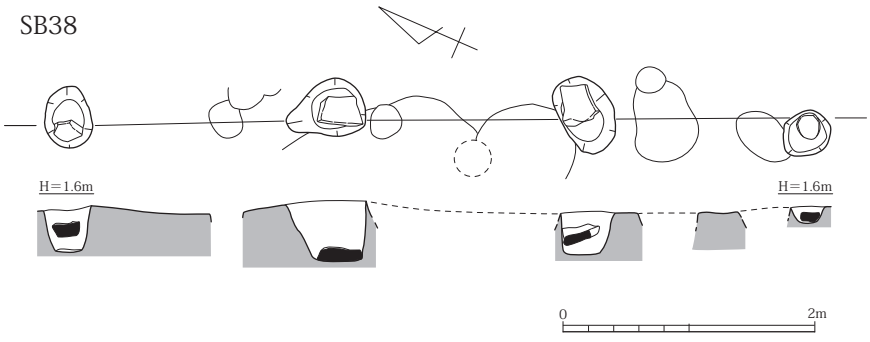


Fig5　SB38 実測図（1/60）

SD35（fig6）

調査区南側で検出した。東西方向にのびる。長さ 220cm 前後で、溝状の土坑ともいえる遺構である。横断面形は U 字形を呈し、縦断面形は西側はほぼ直に、東側は緩やかに立ち上がる。出土遺物はいずれも小片で図化し得ない。

（3）井戸

近現代のものを除くと、2 基検出した。

SE02（fig7）

調査区の北東で検出した。石組の井戸である。北東側は調査区外にのび、北西側には深い攪乱を利用した廃土置き場を設けたことから掘削できなかった。したがって、掘方の全容は明らかではないが、残存部から、やや不整形ながらも円形を呈すると想定され、直径 300m 前後に復元できる。井筒は推定掘方のほぼ中央に据えられる。北側および西側を掘削できなかったことに加え、井筒部分に旧建築物の基礎が残存していたことから掘削は困難を極めた。検出面から 190cm 掘削し、石組の底面までは明らかにできたが、以下の掘削は安全上中止したため、下部構造は明らかではない。出土遺物は多くはないが、以下の遺物から 16 世紀代の遺構と考えられる。

2 は灰青陶器碗である。見込みおよび高台に砂目跡を残す。3 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 2.5cm、口径 11cm、底径 7cm。4・5 は土師器皿である。器高・口径・底径の値は、4 が 1.6cm・6.6cm・5.4cm。5 が 1.5cm・6.8cm。5.2cm。

SE37（Fig7）

調査区中央南寄りで検出した。平面は約 220cm × 240cm の不正円形を呈し、検出面から約 100cm で平坦面を設ける。井筒は西寄りの部分に設けられるが、腐食の

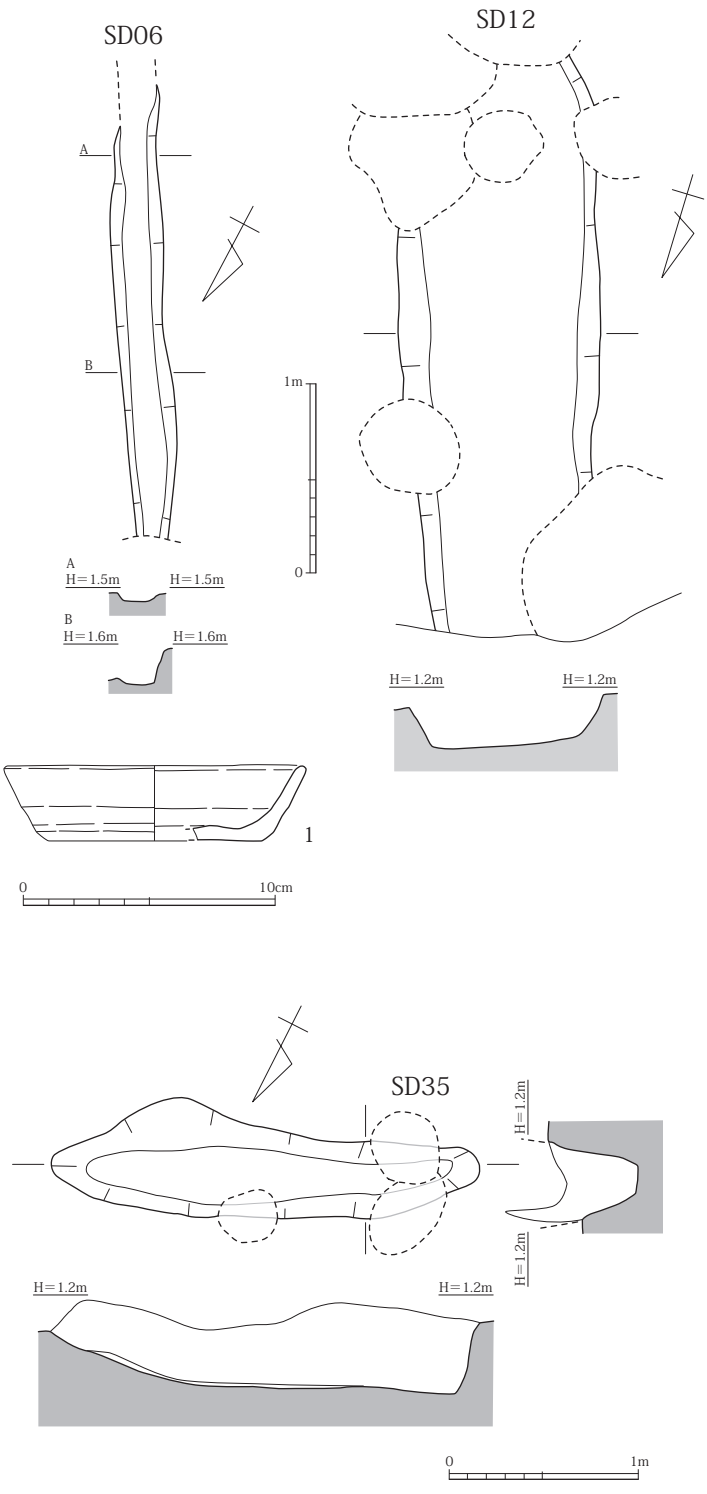


Fig6　SD06・12・35 実測図（1/40）
および SD06 出土遺物（1/3）

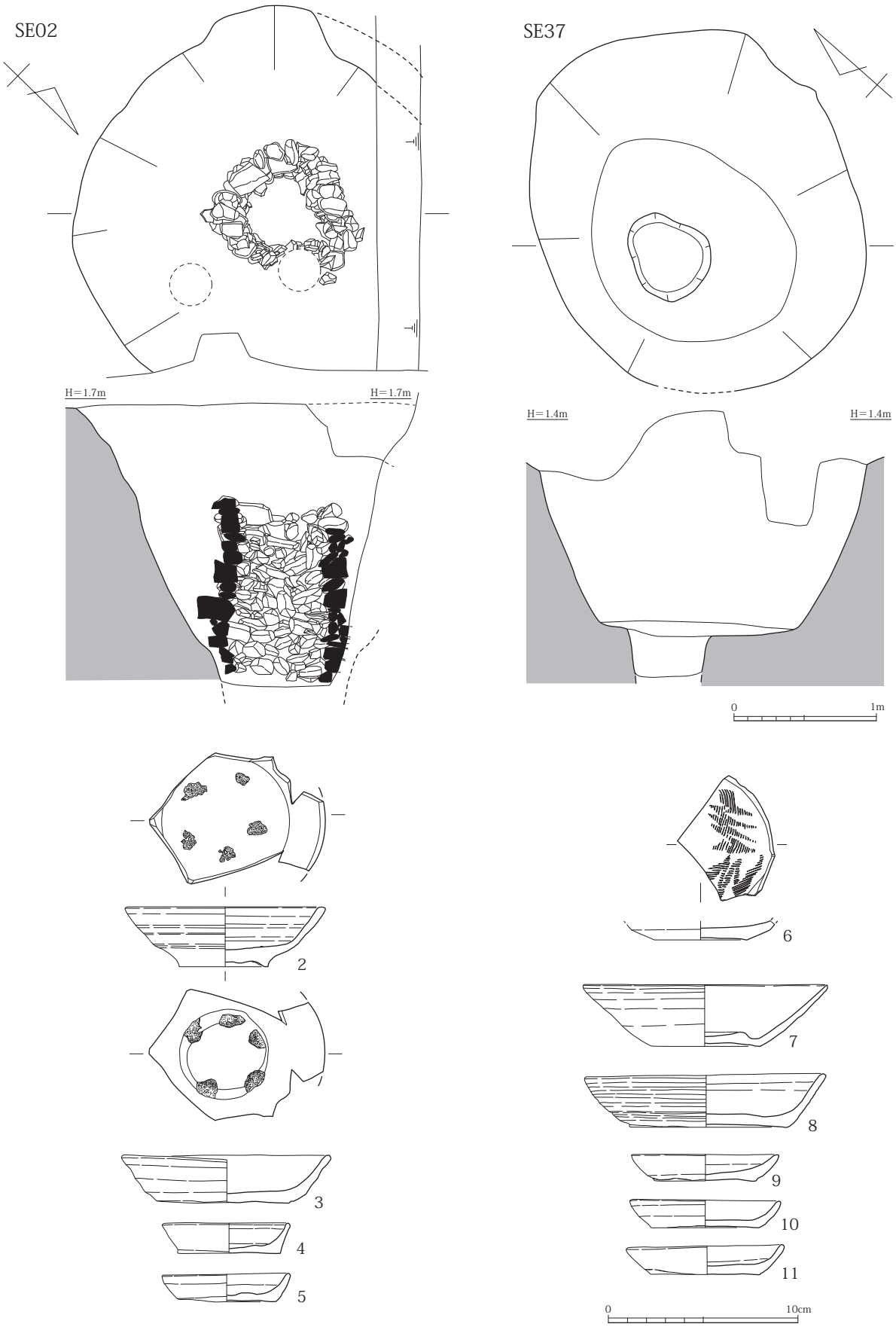


Fig7　SE02・37 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

為、残存していなかった。わずかに痕跡が残り、桶と考えられるが正確には不明である。以下の出土遺物から15世紀前後の遺構と考えられる。

6は同安窯系青磁皿である。他の遺物より古層を示す。7・8は土師器坏である。7はいわゆる大内系土師器である。器壁は薄く、法量における底径の割合は小さい。器高3.3cm、口径12.9cm、底径3.3cm。8は器壁の凹凸が目立つ。器高2.8cm、口径12.7cm、底径8.2cm。9～11は土師器皿である。底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.5cm・8cm・5.6cm。

（4）土坑

大小様々な土坑を検出したが、中規模のものは東側に集中している。

SK03（Fig8）

調査区の東端付近で検出した。検出面上に石が散乱していたことから、石積土坑の可能性を考え、精査、掘削した。覆土中にも礫は含まれていたが、まとまりはなく、二次的なものと考えられる。平面は約170cm × 220cmの長方形を呈し、深さは約45cmを測る。以下の出土遺物から15世紀後半～16世紀前半に位置付けられる。

12・13は明代の染付碗・皿である。14は李朝の白磁碗である。硬質白磁か。見込み、高台には砂目跡が残る。15・16は土師器皿である。底部糸切りで、器高・口径・底径は15が1.6cm・6cm・4.8cm。16が1.5cm・7.1cm・6.1cm。17は周防型瓦質土器の鍋もしくは足鍋である。18は備前焼の擂鉢である。

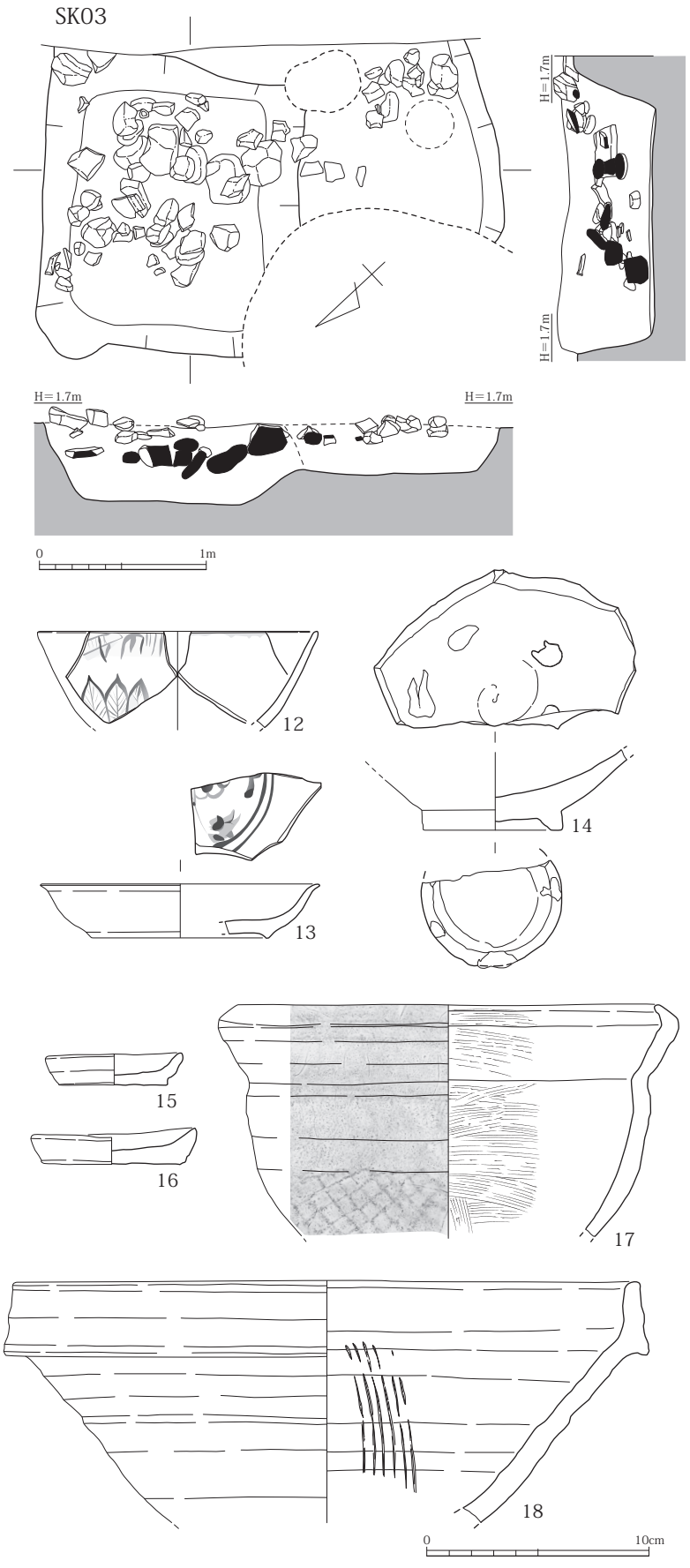


Fig8　SK03実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK05（Fig9）

調査区の北東側で検出した。平面形は約 100cm × 130cm の不整方形を呈する。南側に段状のテラスをもち、北側の最深部は約 60cm を測る。以下の出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半に比定されよう。

19 は龍泉窯系青磁碗の口縁片である。外面の口縁部付近に雷文帯を有する。20 は龍泉窯系青磁坏である。21 は土師器皿である。底部糸切りで、器高 1.5cm、口径 7cm、底径 5.6cm を測る。22 は砂岩性の石臼である。

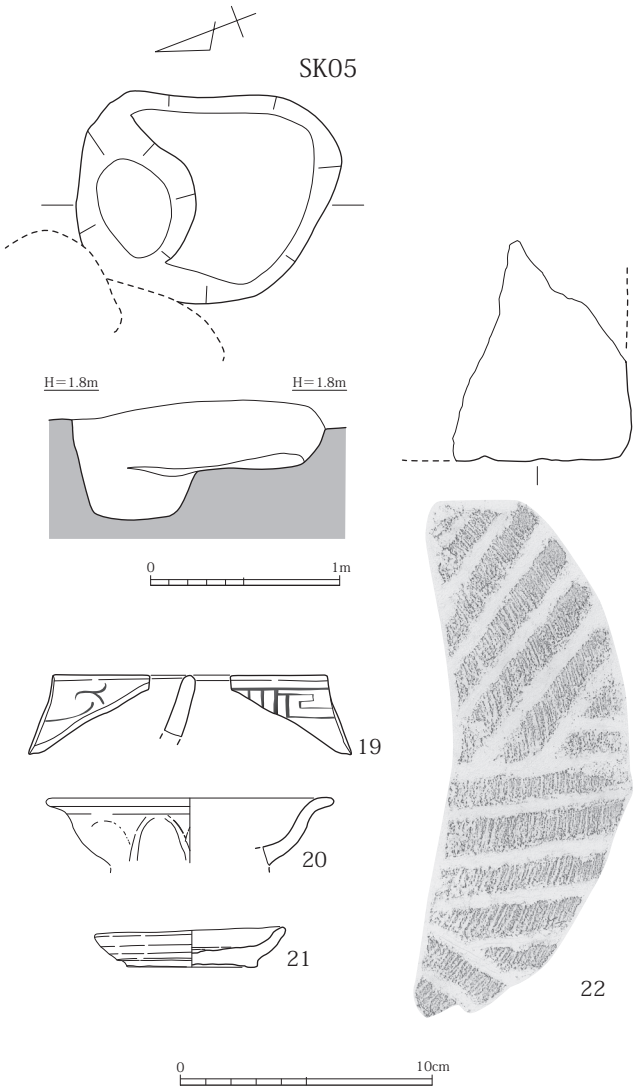


Fig9　SK05 実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3）

SK07（Fig10）

中央北東寄りで検出した。平面は径 25cm 程度の円形を呈し、断面は半円状にゆるやかに立ち上がる。遺構内には検出面から下層にかけて、礫がびっしりと充填される。遺跡内における過去の調査結果では同様の土坑が列をなすことから、掘立柱建物を構成する柱穴ということが明らかになっている。本遺構は単発的に検出されたため、ここでは土坑として報告する。出土遺物で図化し得たのは以下の 1 点のみである。

23 は備前焼の擂鉢である。口縁は上方へとのび、端部は丸くおさめる。

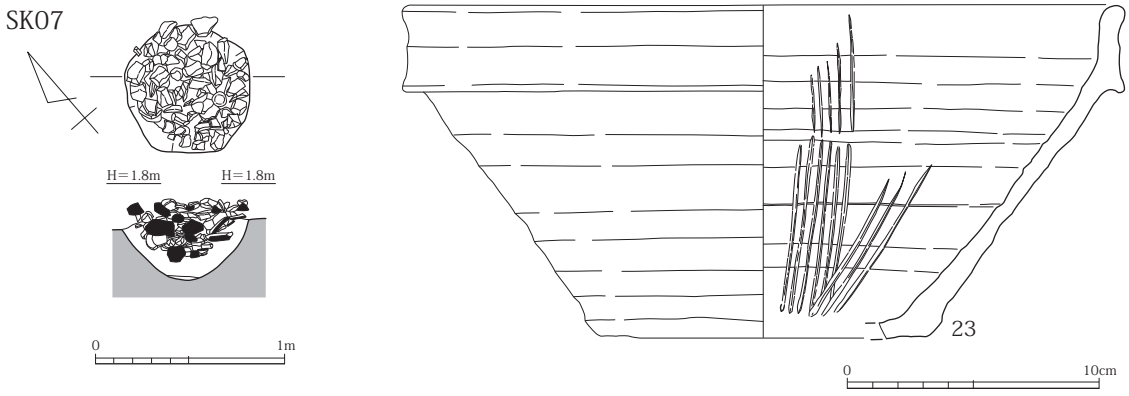


Fig10　SK07 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK09・10・11（Fig11）

調査区の南西部で検出した土坑群である。前後関係は SK10 ≒ SK11 → SK09 である。

SK09 は径 80cm ～ 95cm 程度の不正円形を呈し、断面はやや丸みを持つ逆台形を呈する。深さは約 65cm 程度残存する。SK10 も平面は径 90cm 程度の不正円形をなし、断面は逆台形を呈する。深さは約 50㎝残存する。SK11 は、140cm × 120cm ＋ α の不正円形を呈する。東側に段をもち、最深部は約 95cm を測る。以下の出土遺物から 15 世紀前後の遺構群であると考えられる。

24 は SK09 出土の土師器皿である。底部糸切りで、器高 1.5cm、口径 7cm、底径 5.6cm を測る。25 は SK10 から出土した瓦質の鉢である。いわゆる「奈良火鉢」で、残存部から輪花形を呈する浅型の鉢と推定される。外面には菊花文のスタンプを有する。26 は SK11 出土の龍泉窯系青磁碗の底部片である。内面見込みおよび外底部の釉を輪状に掻き取る。

SK13・14・15・16・17（Fig12）

上記土坑群の南東部に位置する。SK13 ～ 16 は切り合い関係にあり、前後関係は SK15 が最も古く、SK13・14・16 が SK15 を切っており、SK14 は SK13 に切られる。

いずれも不正円形を呈する。SK13 は径 75cm ～ 80cm で深さは 60cm 残存。断面は直に立ち上がる。SK14 もほぼ直に立ち上がり、深さは約 45cm 残存する。平面は残存する南北部分で約 100cm を測るか。SK15 の平面は長軸で約 130cm を測る。断面は逆台形を呈し、50cm 程度残存。SK16 は浅く、深さ 20cm。平面は残存部で 140cm を測る。SK17 は平面 95cm × 120cm、深さは約 70cm を測る。出土遺物で図示し得るものは少なく、時期比定も困難である。あくまでも土師器の法量のみに依拠す

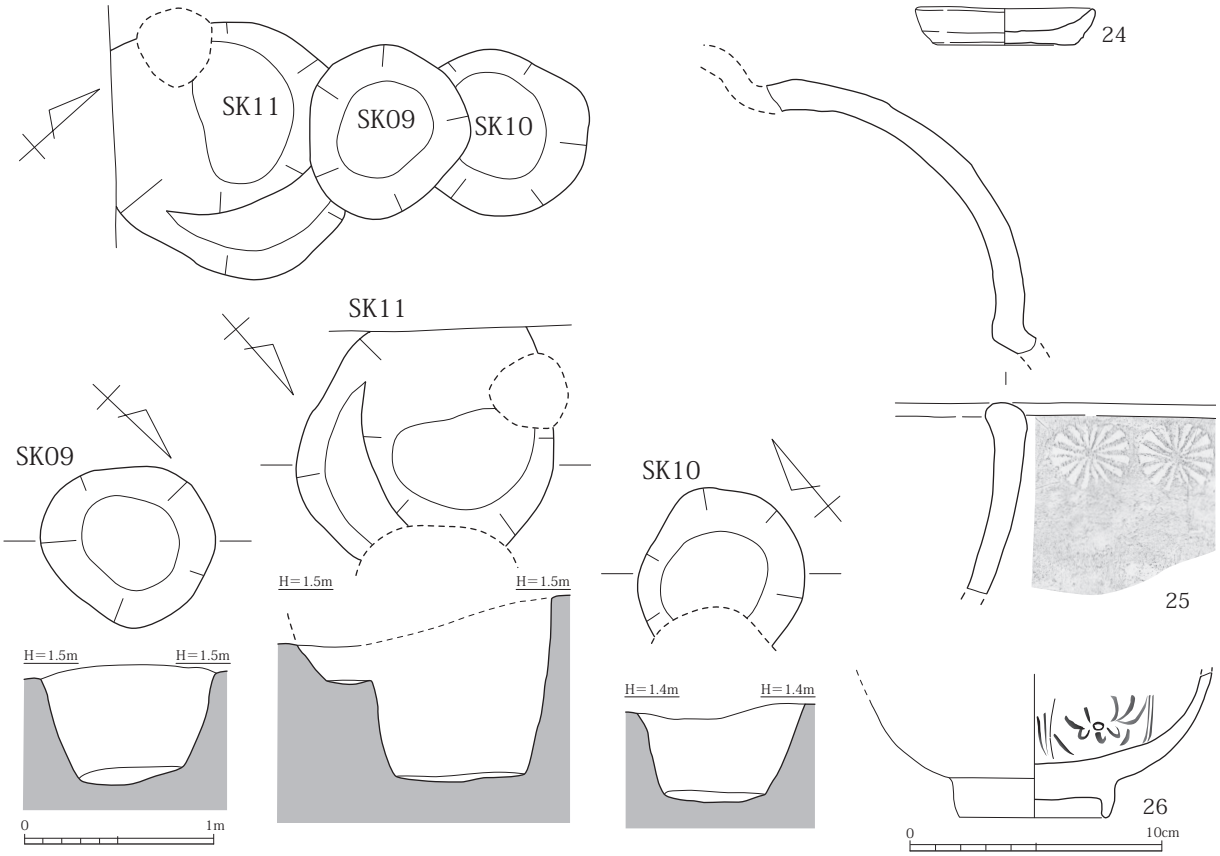


Fig11　SK09・10・11 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

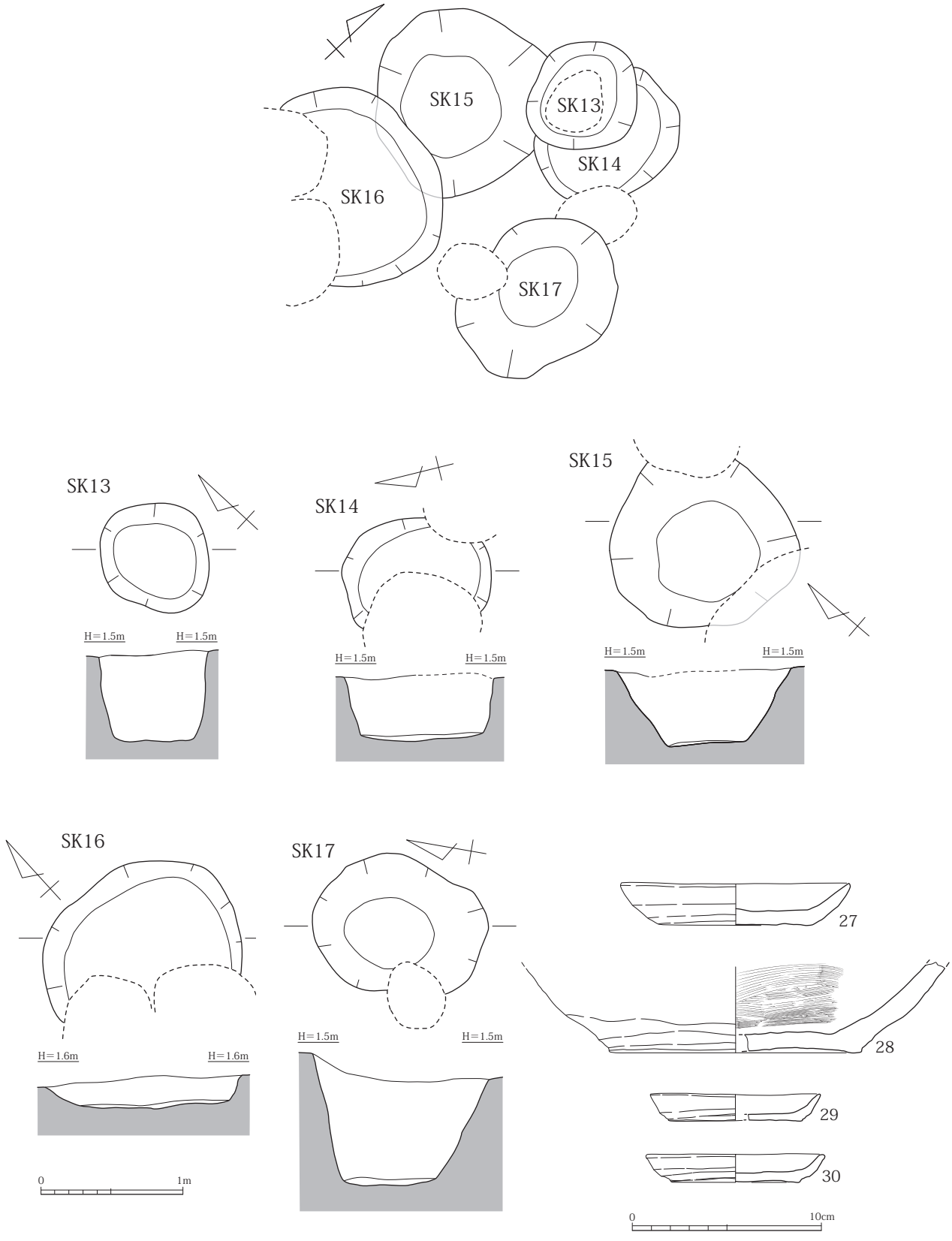


Fig12　SK13・14・15・16・17 実測図（1/40）および SK13・14・16 出土遺物実測図（1/3）

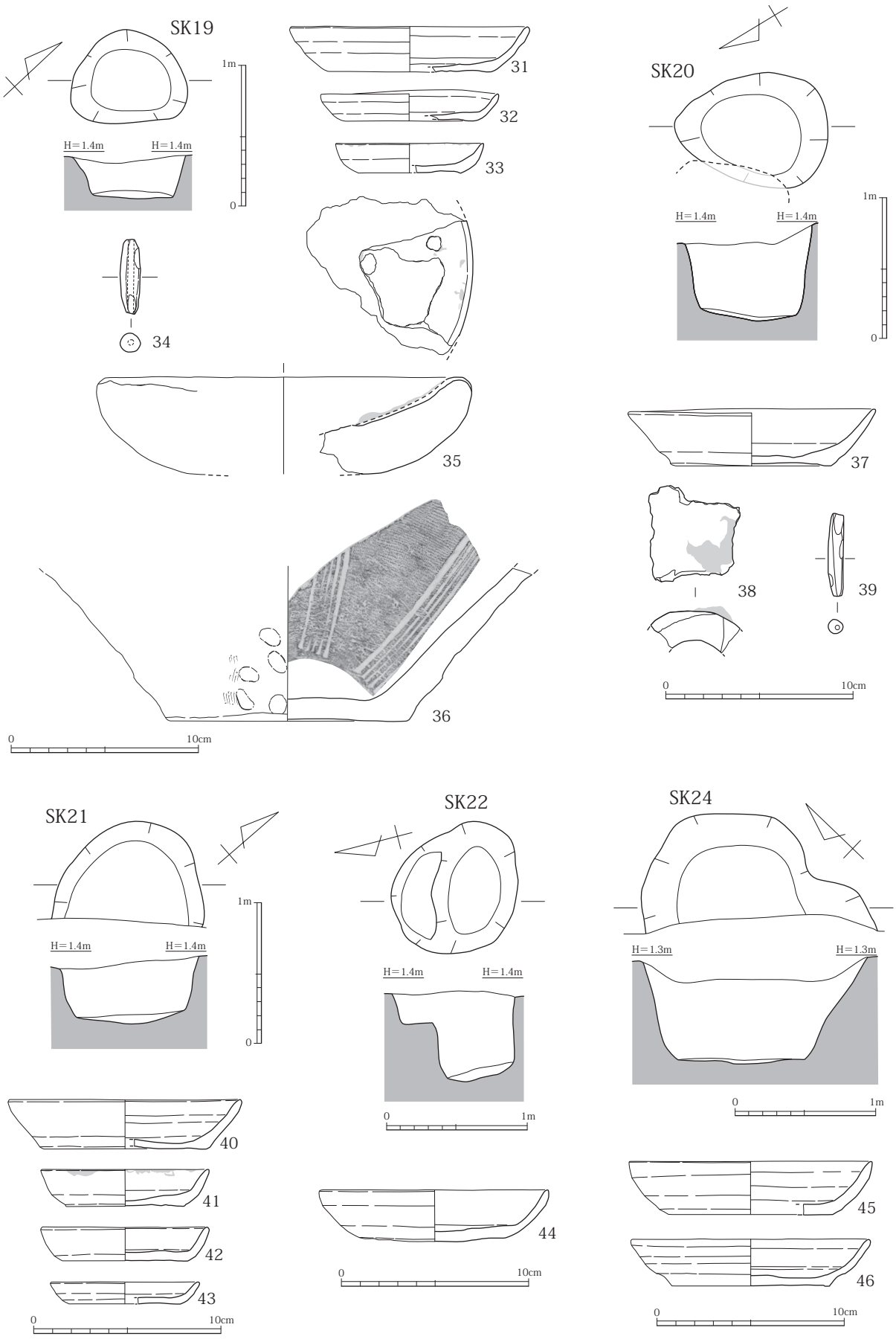


Fig13　SK19・20・21・22・24 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

れば、かなりの時期幅があるようにみえるが、小片を反転復元して図化したことによる誤差、および個体差の範疇とし、皿の器形や周辺の土坑の時期などから、15 世紀前後の遺構とする。

27･28 は SK13 出土。27 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 2.2cm、口径 12.1cm、底径 8.2cm。28 は瓦質の捏鉢である。29 は SK14 出土の土師器皿。底部糸切りで、口縁端部は尖る。器高 1.4cm、口径 9cm、底径 7cm。30 は SK16 出土の土師器皿。底部糸切りで、器高 1.5cm、口径 9.4cm、6.8cm。

SK19（Fig13）

調査区南側で検出した。約 65cm × 80cm の不正円形を呈する。断面は逆台形状で深さ 30cm 程度残存する。限られた数の土師器からの時期比定で若干の齟齬はあろうが、土師器の器形の特徴から 14 世紀後半～ 15 世紀の遺構としておく。

31 は土師器坏である。底部糸切りで体部下半はゆるく立ち上がる。器高 2.4cm、口径 12.8cm、底径 8.7cm を測る。32･33 は土師器皿である。いずれも底部糸切で、器高･口径･底径は、32 が 1.6cm･9.5cm・7cm、33 が 1.6cm・7.9cm・5.5cm である。33 は灯明皿として転用したためか、口縁端部に煤が付着する。34 は管状土垂である。35 は取鍋の破片である。36 は瓦質の擂鉢である。色調はにぶい橙色を呈する。

SK20（Fig13）

調査区の南側で検出した。SK19 に一部を切られる。平面形は約 80cm × 100cm の卵型を呈する。立ち上がりは直で、深さは約 55cm 残存する。以下の土師器の特徴及び SK19 との関係から 14 世紀～ 15 世紀前半の遺構としておきたい。

37 は土師器坏である。器高 3cm、口径 13.2cm、底径 8.6cm。底部糸切りで、やや内湾しながら立ち上がる。38 は羽口の小片である。39 は管状土垂である。

SK21（Fig13）

調査区の南端で検出した。南東部は調査区外にのびるが残存部から楕円形を呈するものと考えられる。深さは 40cm を測る。以下の出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半に位置付けられるか。

40 は土師器坏である。底部糸切りで、器高は 2.6cm、口径 12.4cm、底径 8.6cm。41 ～ 43 は土師器皿である。41・42 は近い数値を示し、法量の平均は、1.9cm・9cm・6.5cm。41 は口縁端部に煤が付着する。灯明皿として転用したものか。43 は器高 1.2cm、口径 8cm、底径 6cm。

SK22（Fig13）

調査区の南端で検出した。不正円形を呈する土坑である。北側に段をもち、深さは約 65cm 残存する。図示し得た遺物は 1 点のみで、詳細な時期比定は困難であるが、中世後半の遺構と考えられる。

44 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 2.7cm、口径 12.3cm、底径 7.8cm。

SK24（Fig13）

調査区南西端で検出した。平面不整形の土坑である。南西部は調査区外にのびる。断面は逆台形を呈する。図化し得た遺物は 2 点だが、器形の特徴から 14 世紀後半～ 15 世紀前半前後と推定する。

45･46 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高･口径･底径は、45 が 2.9cm･13cm･8.8cm、46 が 2.5cm・12.8cm・8.4cm である。

SK26（Fig14）

調査区の中央やや東寄りで検出した。約 90cm × 260cm の東西方向に長い溝状の土坑である。深さは約 45cm を測る。図示した土師器は 14 世紀後半～ 15 世紀の特徴を示す。

47 ～ 49 は土師器坏である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.9cm・12.8cm・8.2cm。50 は陶器の口縁片。壺か。

SK27（Fig14）

調査区中央やや北寄りで検出した。平面は不整形で約 120cm × 200cm を測る。床面はほぼ平坦であるが、東側の一部が落ち込み、この部分の深さは検出面から約 70cm 程度を測る。以下に図示した遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半の遺構と考えられる。

51 ～ 54 は土師器坏である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は、2.9cm・13.3cm・9.3cm である。55 ～ 57 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.9cm・9㎝・6cm である。58 は土師器の脚付の坏である。脚部は高く細い。59 は管状土垂である。

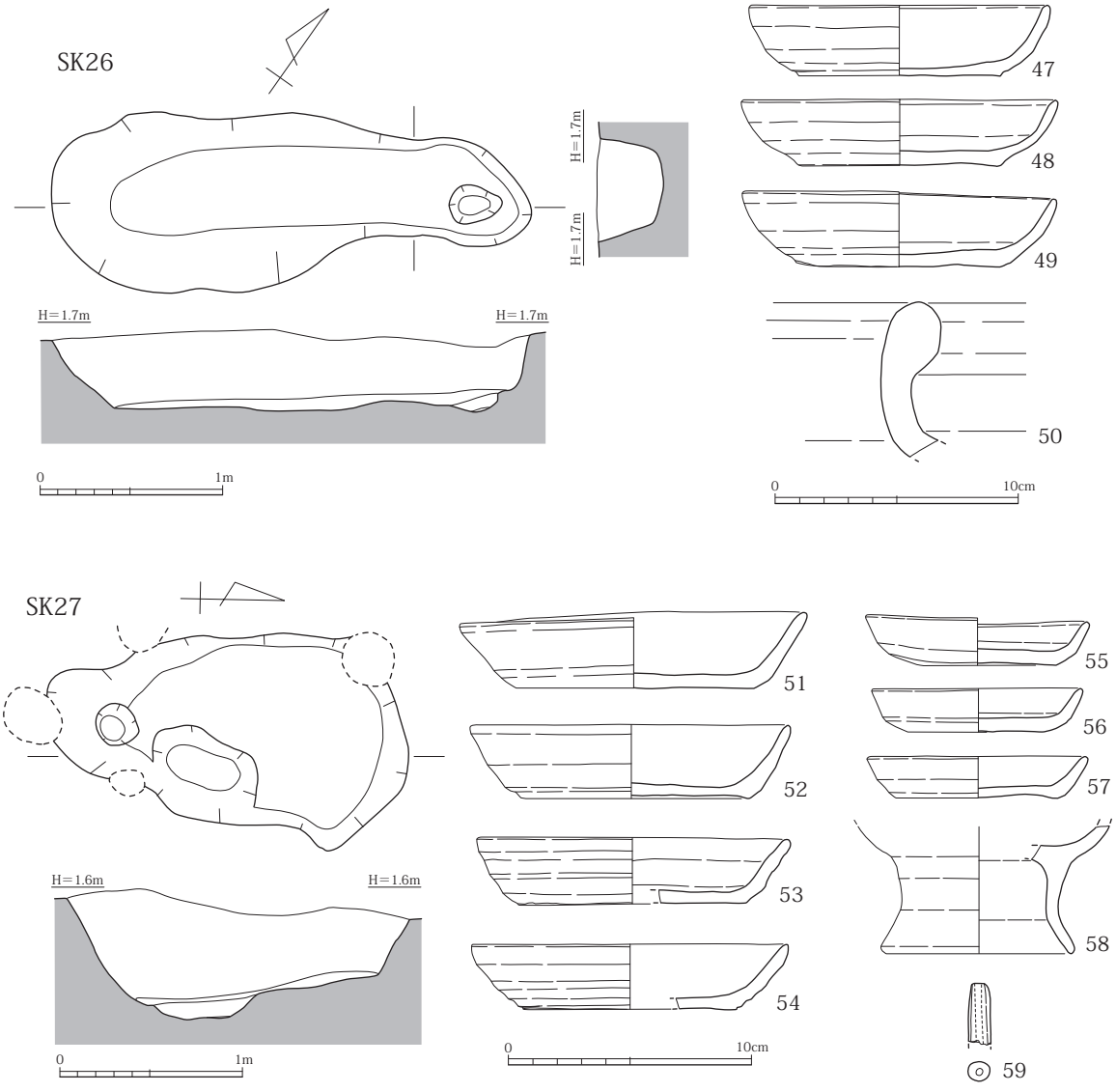


Fig14　SK26・27 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK28（Fig15）

調査区中央北寄りで検出した。約 85cm × 110cm のややいびつな隅丸方形を呈する。断面はやや直に立ち上がる逆台形で、深さは約 50㎝を測る。以下の出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半頃の遺構か。

60 ～ 62 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は、2.6cm・12.3cm・8.3cm。63・64 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、1.2cm・7.9cm・6.2cm である。

SK29（Fig15）

調査区の中央東寄りで検出した。平面は 60cm × 70cm の楕円形を呈する。断面はほぼ直に立ち上がる逆台形を呈し、南東部には段を有する。深さは最深部で約 60cm を測る。図化し得た遺物は以下の３点で詳細な時期は不明であるが、土師器の法量や周辺遺構との関係から中世後半と考えられる。

65 は白磁埦である。見込みの釉薬を輪状に掻き取る碗Ⅷ類である。本調査地点出土遺物の中では最古級の遺物だが、遺構に伴うものではない。66 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 3cm、口径 12.3cm、8.1cm である。67 は土師質の鍋である。内面は横方位の密なハケ目が施される。外面には煤が付着する。

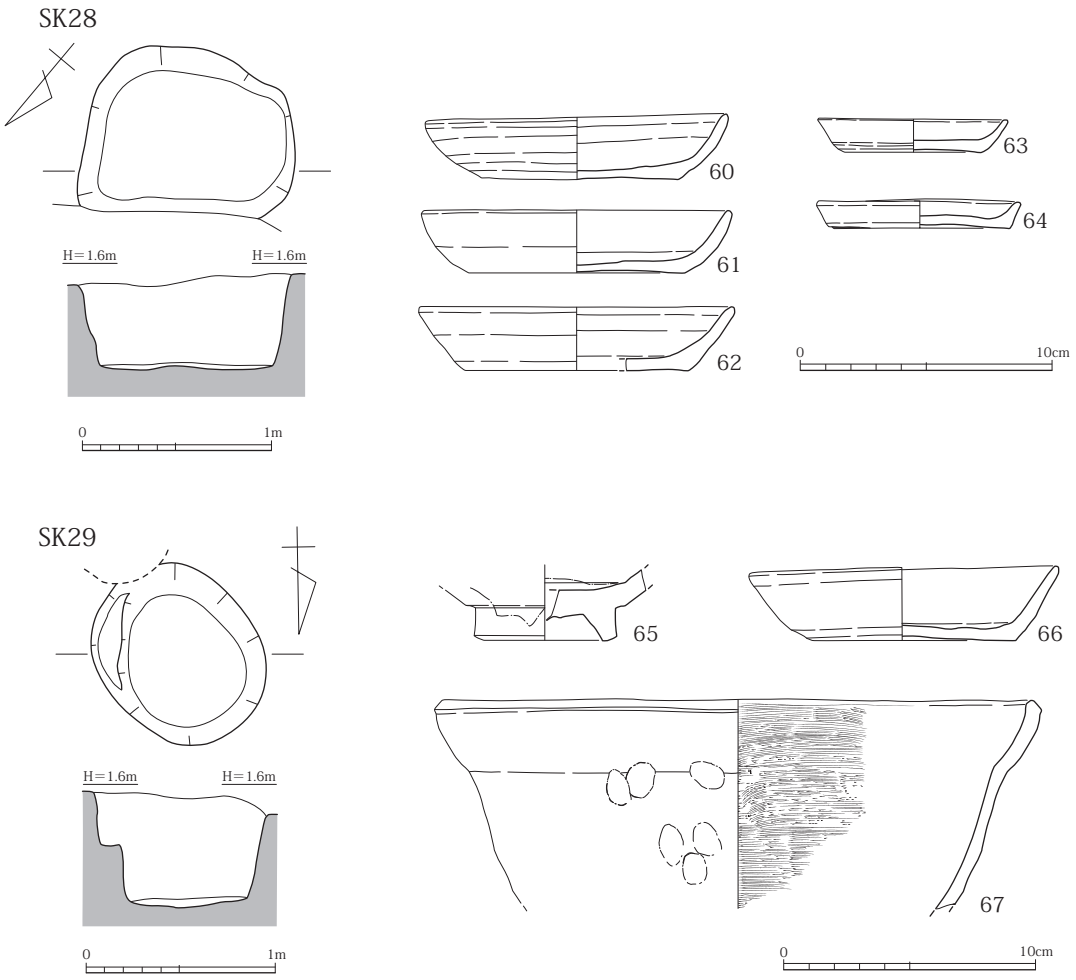


Fig15　SK28・29 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK33（Fig16）

調査区南西側で検出した。北側が攪乱によって切られる。残存部で 80cm × 40cm ＋ α を測る。立ち上がりはほぼ直で、深さは最深部で約 90cm 程度残存する。以下の出土遺物から 14 世紀後半～15 世紀前半の遺構と考えられる。

68･69 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高･口径･底径の平均は、2.1cm･12㎝･8.3cm。70 ～ 72 は土師器皿である。いずれも底部糸切で、器高･口径･底径の平均は、1.4cm･7.8cm･5.9cm。

SK36（Fig16）

調査区中央やや東寄りで検出した。平面はやや不整形ではあるが方形を志向したものと考えられる。約 170cm × 240cm を測る。断面は逆台形を呈し、深さは約 90cm 残存する。本調査地点で検出した土坑の中では最も大型の土坑である。出土遺物はいずれも小片で時期は不明。

（5）その他の出土遺物（Fig17・18・19・20・21）

ここでは、遺構検出時出土遺物、遺構覆土中出土遺物、ピット出土遺物などをまとめて報告する。ここで、遺構覆土中出土遺物としたものは、遺構検出後、精査したものの遺構のプランや切り合いが不明確であったため、プランが認識できるまで、やむを得ず掘り下げた際に出土したものである。

Fig17・18・19 の 73 ～ 110 は遺構検出時および覆土出土遺物である。73 ～ 75 は白磁埦である。73 は白磁埦Ⅴ類である。高台は細く高い。外底部には墨書を有するが判読は不能。74 は碗Ⅷ類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。75 は碗もしくは小碗か。腰が張り、外反しながら立ち上がる。76・77 は同安窯系青磁碗である。76 は体部外面に粗い櫛目文を有する。77 は底部片で、体部を丁寧に打ち欠く。78 は龍泉窯系青磁碗である。79 は龍泉窯系青磁坏である。内面には花弁状の削りを施す。80 は明代染付碗である。外面には芭蕉葉文が描かれ、見込みにも不明だが文様が描かれている。

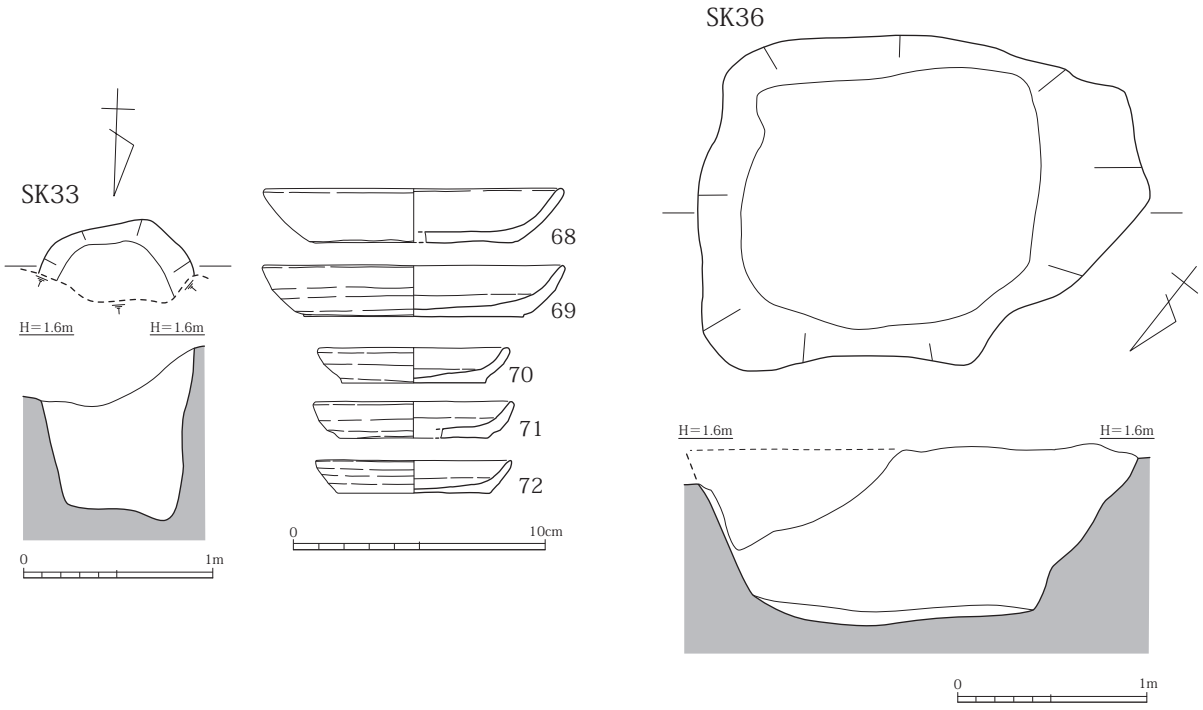


Fig16　SK33・36 実測図（1/40）および SK33 出土遺物実測図（1/3）

81・82 は象嵌青磁である。高麗～李朝への転換期のものと考えられる。83 ～ 85 は李朝の陶磁器である。83 は灰青陶器である。高台及び見込みに砂目跡を残す。84 も灰青陶器か。高台には砂目跡が顕著に残る。85 は硬質白磁か砂底で、見込みには胎土目が残る。体部を丁寧に打ち欠く。86・87 は中国陶器耳壺である。同一個体と考えられるが、接合しないため図上復元している。釉は灰オリーブ色を呈し、薄く均一にかかる。88 は李朝の陶器擂鉢である。釉は茶褐色を呈し、口縁部上端は露胎とする。89 は備前焼の擂鉢である。90 は須恵質鉢である。東播系須恵器か。91 は瓦質の捏鉢。内外面ハケ目仕上げで､外面には指頭痕が残る。92 は瓦質の鉢である。口縁部下に 2 条の突帯を巡らし、間に雷文のスタンプを有する。93 ～ 97 は土師器坏、98 ～ 104 は土師器皿である。全て底部糸切り。98・99 は煤が付着し、燈明皿として転用した可能性がある。105 ～ 110 は土垂である。

Fig20・21 の 111 ～ 137 はピット出土遺物である。111 は龍泉窯系青磁碗である。体部を丁寧に打ち欠く。112・113 は滑石製石鍋である。112 は復元径 18.6cm 程度の小型品。114 ～ 117 は瓦質土器である。114 は擂鉢。内面は横方位のハケ目仕上げ後にスリ目を施す。115 は捏鉢か。口縁端部をわずかに内側につまみ出す。116 は捏鉢である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。117 は底部のみ残存する。捏鉢か。色調はにぶい黄橙色を呈する。118 は須恵質の甕である。立ち上がりはやや内湾するものの、ほぼ直で、頸部は強く屈曲する。119 ～ 127 は土師器坏、128 ～ 133 は土師器皿である。全て底部糸切りである。134 ～ 137 は土垂である。

Fig21 の 138 は攪乱出土遺物である。龍泉窯系青磁皿か。碁笥底状の底部をもち、口縁下で外反する。釉は灰オリーブ色を呈する。

Ⅲ　小結

以上、206 次調査で検出した遺構・遺物を個別に概説してきたが、最後に調査成果を各項目ごとにわけ、簡単にまとめたい。

206 次調査地点における遺構の消長

本調査地点で出土した遺物のうち時期を特定できたもので、最も古い時期に属するのは SE37・SK29 およびその他の出土遺物として取り上げた 12 世紀中頃～後半に位置付けられる白磁・青磁である。本時期は博多浜と息浜が陸続きになった時期で、息浜において古門戸町を中心に遺構がわずかに検出されるようになる時期である。対象地が位置する奈良屋町周辺では、この時期における明確な遺構は検出されていないが、以上の出土遺物から決して密ではないにしても周辺に当該期の遺構がひろがっていた可能性は十分考えられる。

本調査地点で検出した遺構は中世後半を中心とする。各遺構の出土遺物における土師器の比率は極めて高いが、該期の土師器は法量に著しい変化が認められず、各遺構単位でみれば、わずかな遺物から時期比定しているものもあり、遺構の消長には少なからず誤差があるものと考えられる。しかし、ほぼ全ての遺構は 14 世紀～ 16 世紀の範疇におさまると考えられ、この結果は奈良屋町に所在する他の調査地点の成果と同様の傾向を示す。また、本時期は息浜における遺構の検出割合が、古代以来の中心であった博多浜での検出割合を凌駕する時期であると考えられるが、その傾向を端的に表す成果が得られたといえよう。これらの検出遺構は建物および柱穴列や土坑など、各遺構ごとに一定のまとまりをもつことが認められる。

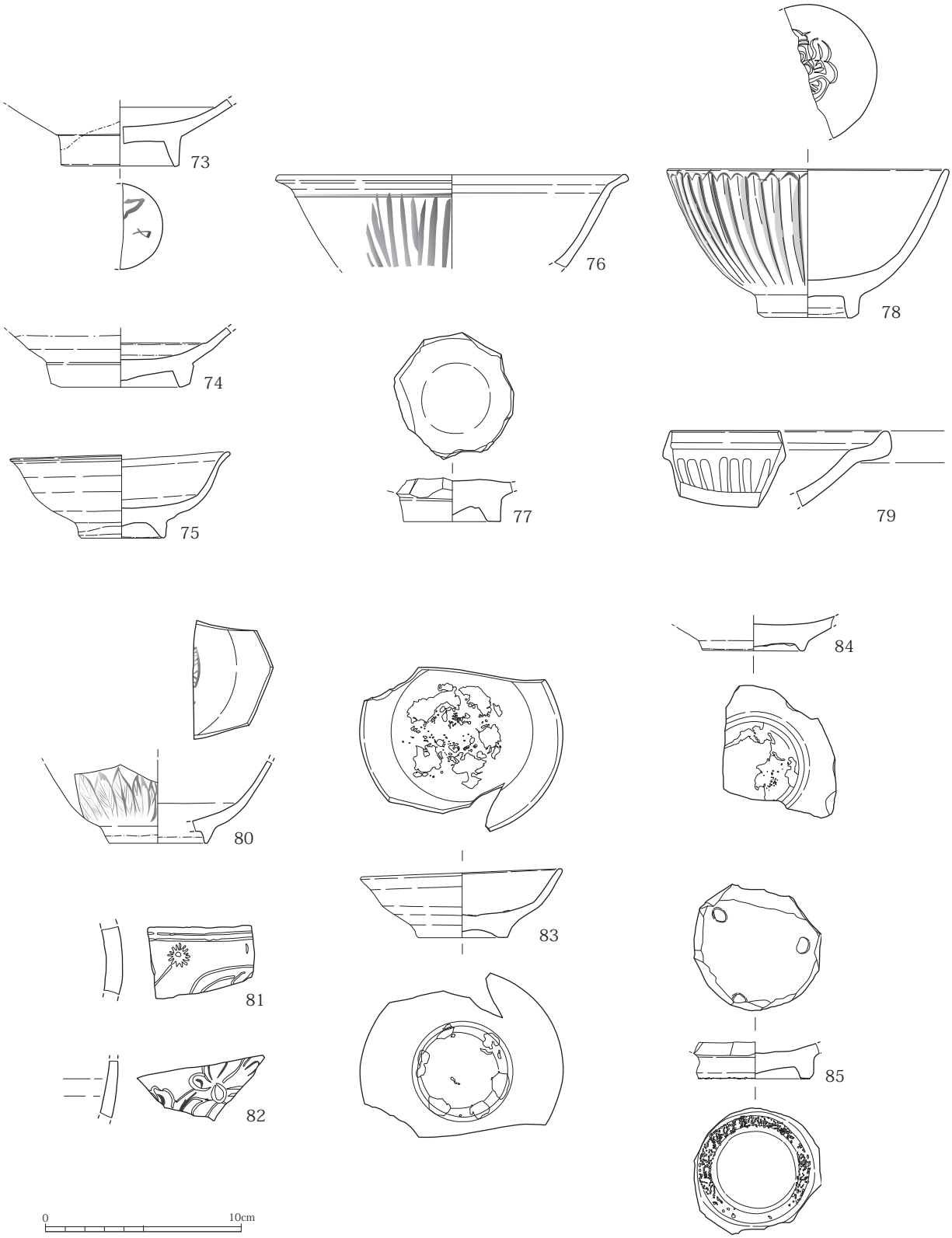


Fig17　その他の出土遺物 1（1/3）

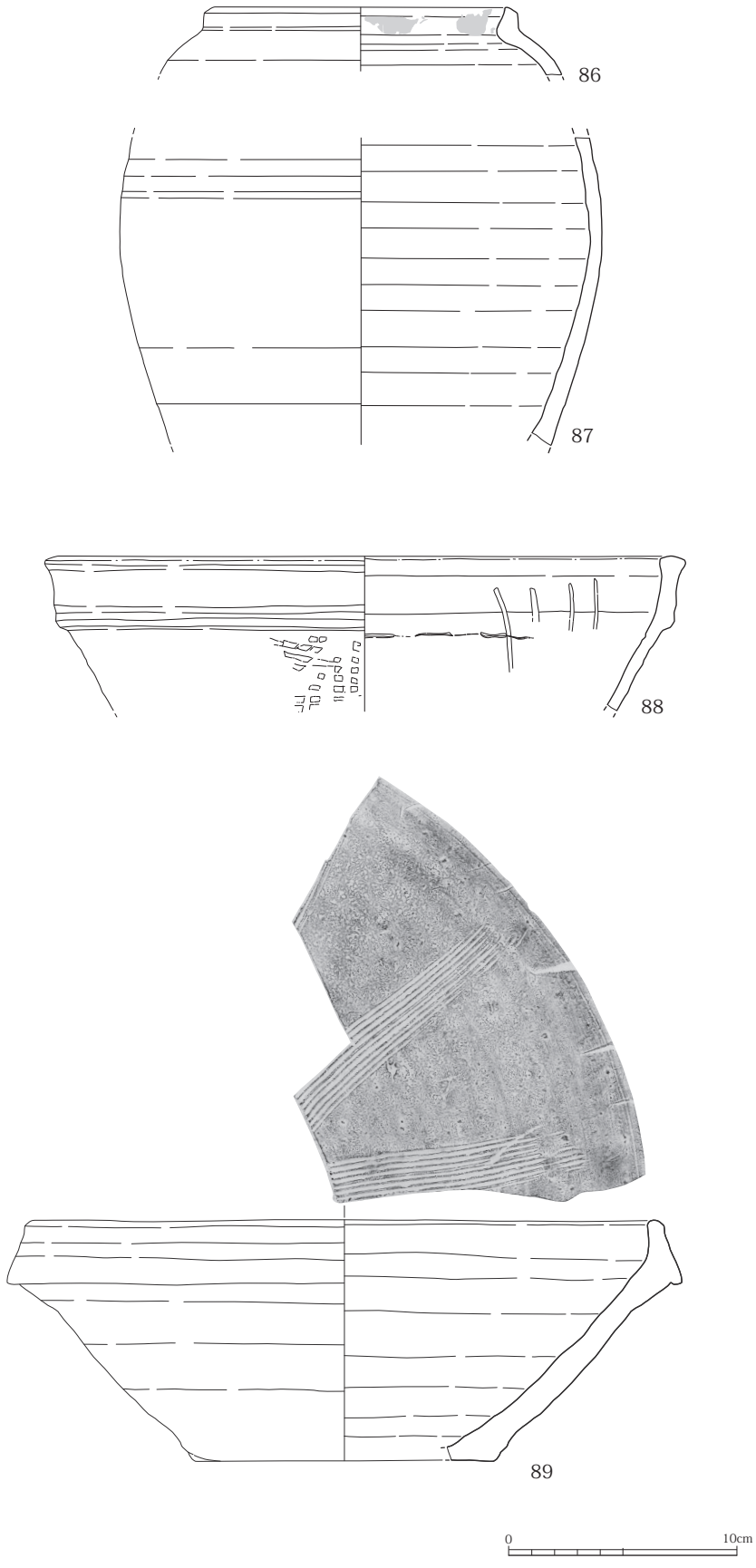


Fig18　その他の出土遺物２（1/3）

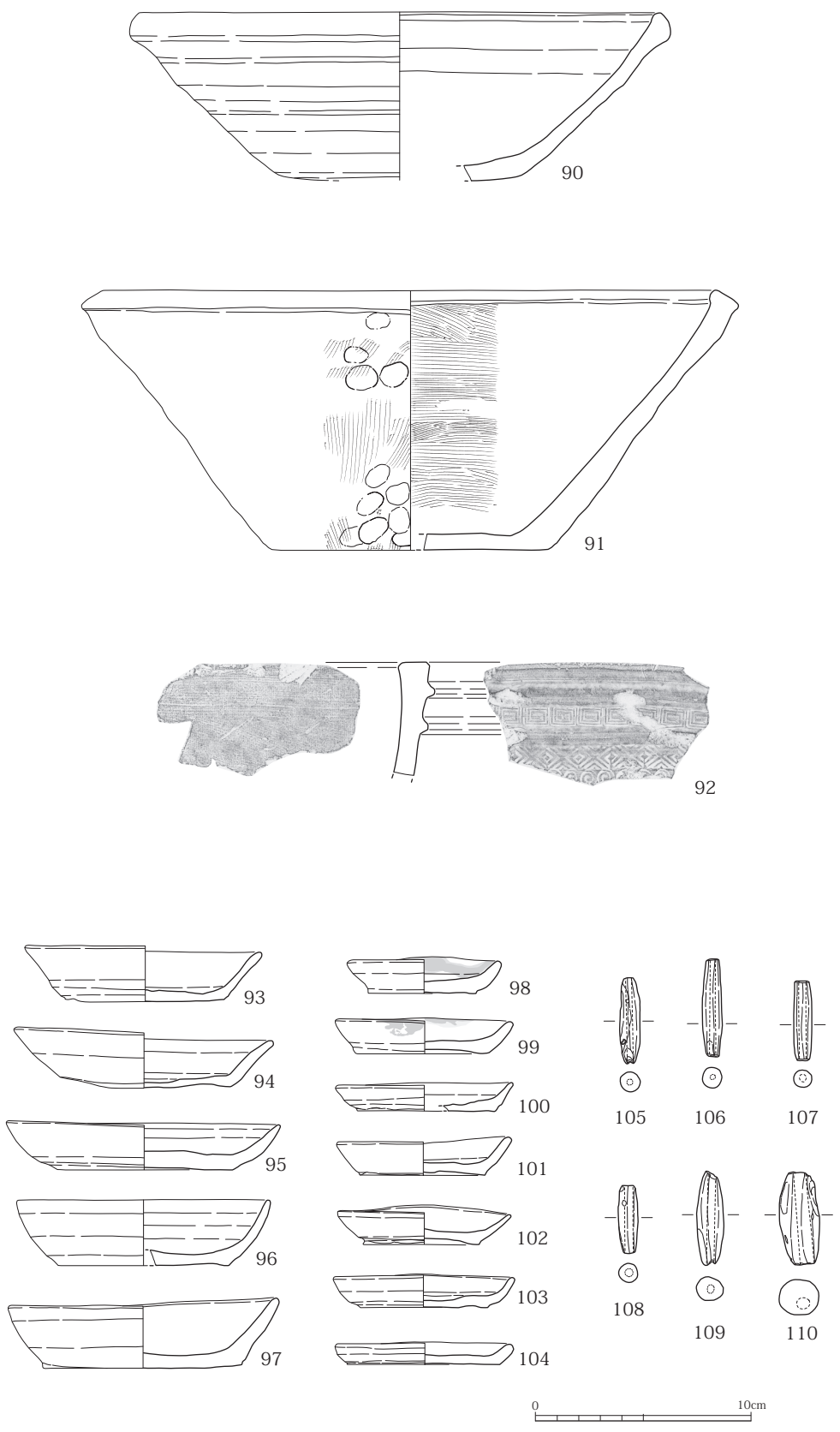


Fig19　その他の出土遺物３（1/3）

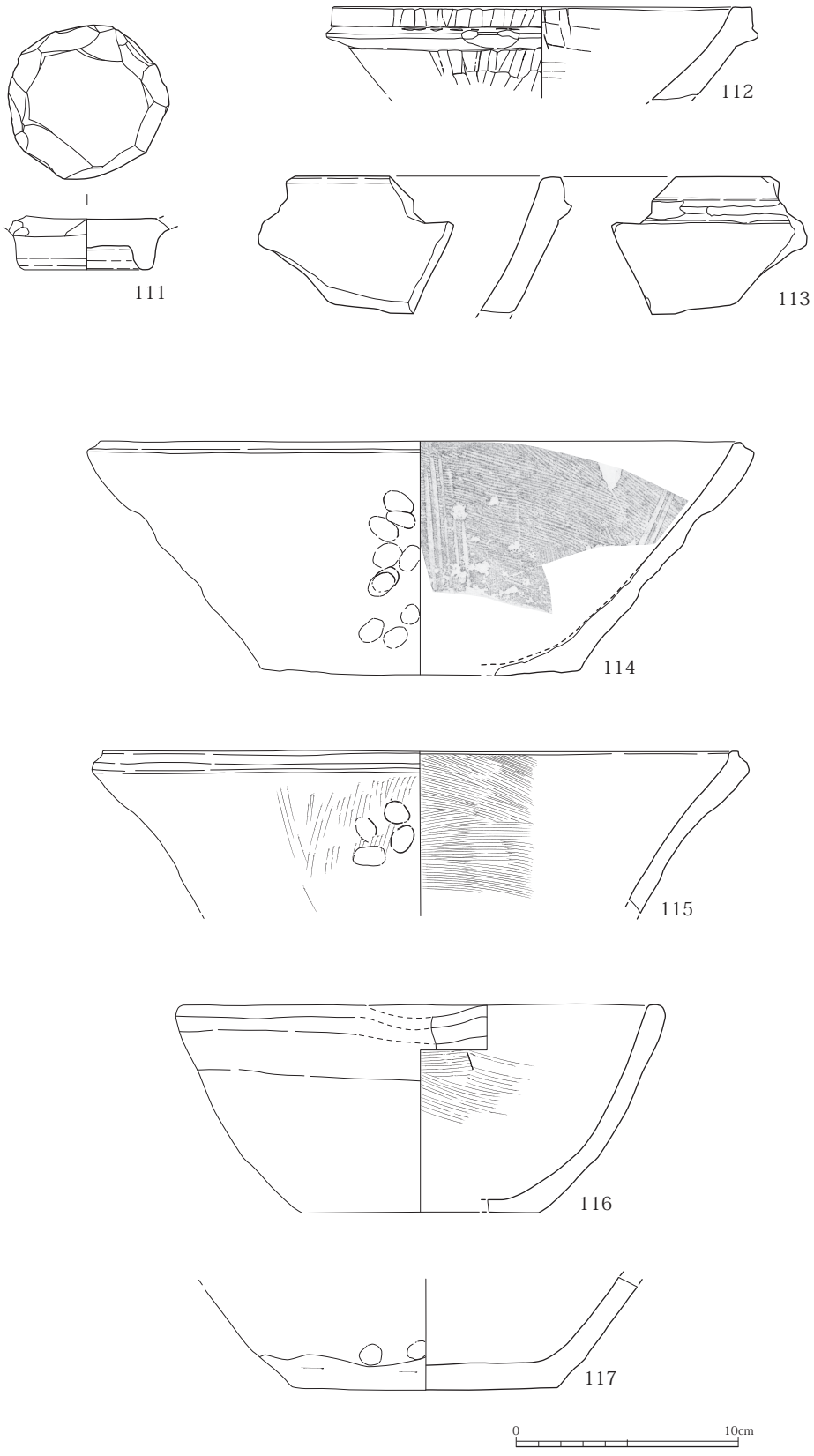


Fig20　その他の出土遺物 4（1/3）

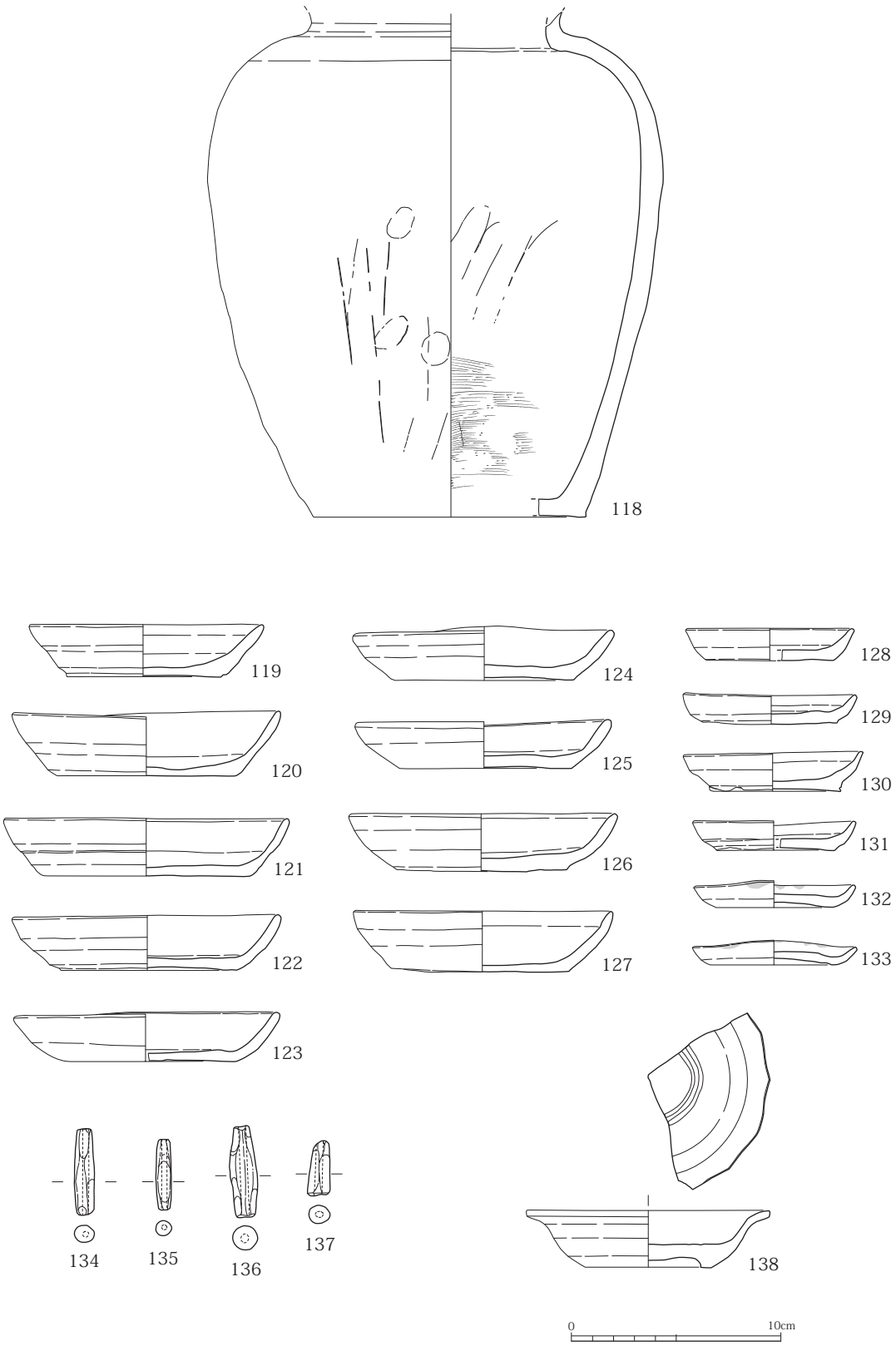


Fig21　その他の出土遺物５（1/3）

遺構の分布について

本調査地点で検出した遺構は、井戸・掘立柱建物・溝・土坑である。このうち土坑は、比較的大規模なものと、径 100cm 前後のほぼ円形を呈する中規模のものに大別されるが、後者は調査区の南端付近で集中的に検出されている。また、同様に調査区の中央部付近では、柱穴がまとまって検出されている。この柱穴には根石をもつものも含む。報告中では確実に建物を構成する柱穴列と判断した SK38 のみを取り上げたが、Fig22 に破線で示すように、柱穴が列をなすものは他にも確認されており、複数棟の建物が本来はあったものと考えられる。

博多遺跡群ではこれまでに複数の調査が実施されているが、都市ゆえに後代の遺構との関係で一時代における遺構のまとまりを復元するのは極めて困難である。本調査は実質 1 面での調査となったが、検出した遺構が近い時期のものであり、結果として上記のように遺構の傾向を明確にとらえることができた。遺跡を構成する屋敷の構造を考えるための重要な成果といえよう。

遺構群の軸について

本調査地点では、上記の建物や溝など、方位の志向性を推定できる遺構を複数検出している。それらを Fig22 に網かけで記しているが、全て同軸もしくは極めて近い軸をもち、いずれも正方位からやや西にふれる。これらは 165 次調査・204 次調査で検出された道路状遺構等とほぼ同軸をとる。上記の 2 調査地点の道路は砂丘尾根線に規制されたものと考えられるが、息浜で遺構が検出されるようになる 12 世紀後半には整備されたことが明らかになっている。これと本調査地点の成果を考慮すると、この自然地形に即した町割りは、整備後著しい変化をすることなく、16 世紀前後までは継続したものと考えられよう。また、推測ではあるが、この町割は、後の太閤町割による町場の再編まで継続した可能性も考えられる。

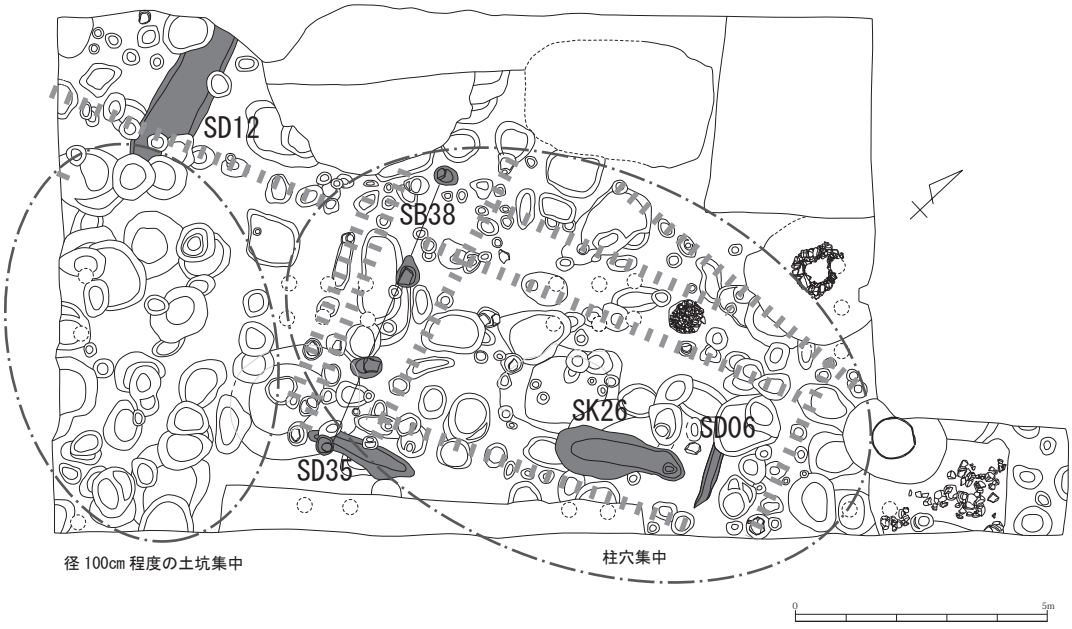


Fig22　第 206 次調査遺構配置図 2（1/150）

PLATES

PL1

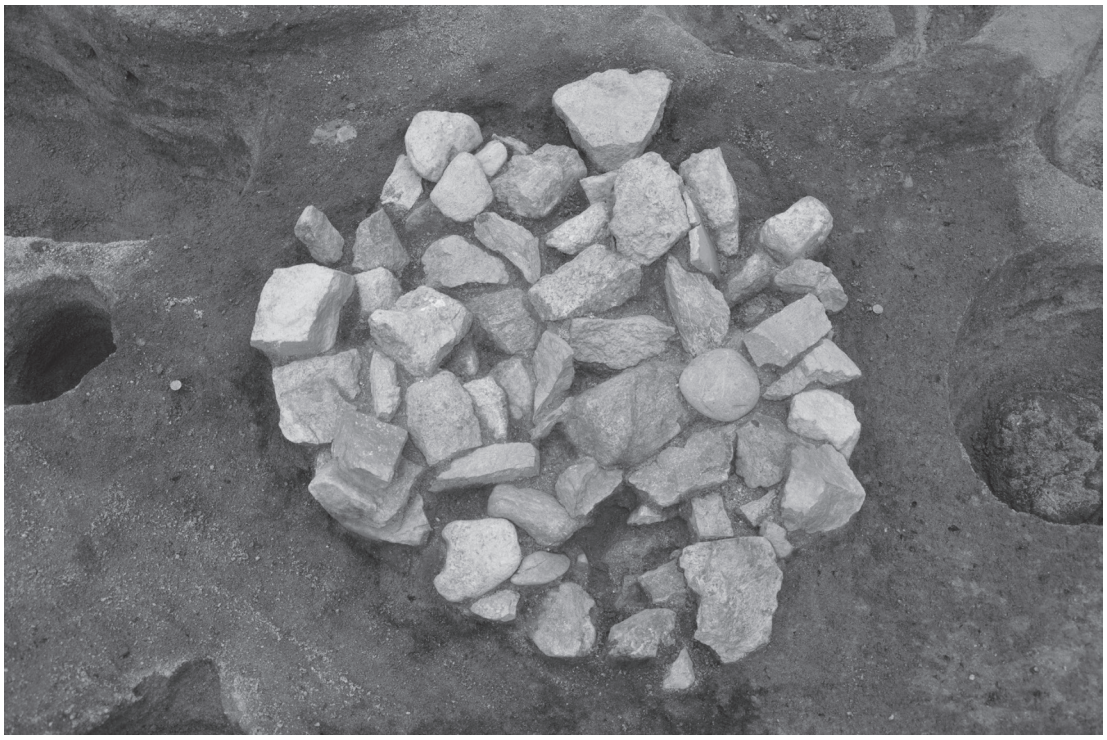
1　調査第 1 区全景（南西から）

2　調査第 2 区全景（北から）

1　調査第３区全景（西から）

2　SK03 礫出土状況（南東から）

PL3



1　SK07 検出状況（南西から）

2　SK27 完掘状況（北から）

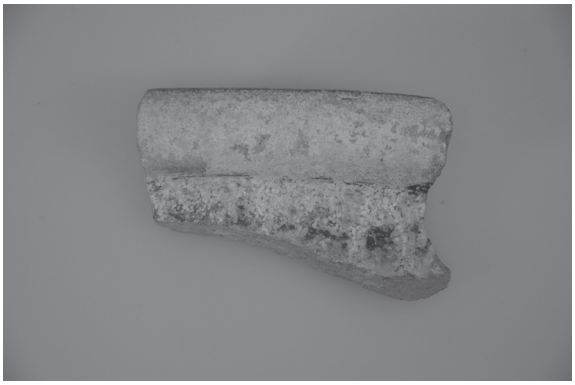
1　SK36 完掘状況（北東から）

2　SE37 完掘状況（南東から）

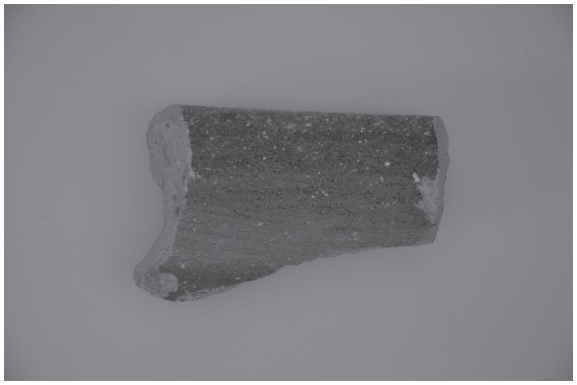
PL5

1　SK03 出土遺物（14）

2　SK19 出土遺物（35）



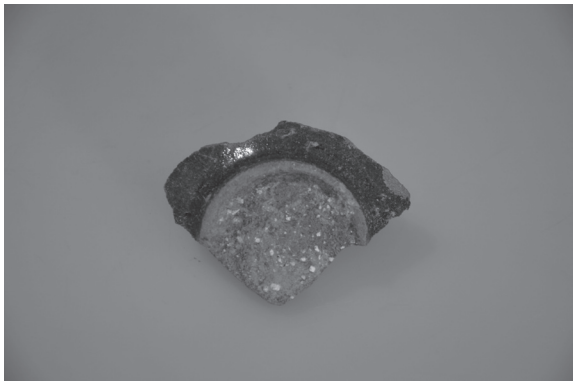
3　SK26 出土遺物（50 外面）



4　SK26 出土遺物（50 内面）

5　その他の出土遺物（73）

6　その他の出土遺物（78）



7　その他の出土遺物（84）

8　その他の出土遺物（85）

報告書抄録

ふりがな	はかた160
書名	博多160
副書名	博多遺跡群第206次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1340集
編著者名	中尾祐太
編集期間	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	平成30年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐんだい206じ 博多遺跡群第206次	ふくおかしはかたくならやまち４６ばん 福岡市博多区奈良屋町46番 １・２、４７ばん１・２・３・４ 1・2、47番1・2・3・4	40132	0121	33.59.78	130.40.55	2016.6.13 ～ 2016.8.24	170	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落跡	中世	土坑、井戸、柱穴	陶磁器、土師器	

要約

対象地は博多遺跡群の北側、「息浜」に位置する。息浜における遺構・遺物の増加は中世後半期に顕著であるが、本調査地点で検出した掘立柱建物(柱穴列)、井戸、土坑、溝なども、ほとんどが14世紀～15世紀に属し、同様の傾向を示す。

検出した遺構のうち、方位の志向性が推定できる柱穴列や溝などは、それぞれで若干の違いはあるが、南北正方位からやや西にふれる軸をもつ。これは息浜に設置された元寇防塁や周辺の調査地点で検出された溝などと同様の傾向を示しており、これらから砂丘の尾根線に規制された町割りをうかがうことができる。

博多 160
博多遺跡群第 206 次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1340 集
2018 年 (平成 30 年)3 月 26 日
発行　福岡市教育委員
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1
印刷　國崎美峰堂
福岡市東区箱崎 1 丁目 20 番 5